



SUSTAINABLE
DEVELOPMENT
GOALS



協会webサイト

- 平和と音楽の調べ 長崎ピース交響詩
- 原爆死没者名簿筆耕 森田孝子大書道展
- 寄稿「被爆80年によせて」
- 平和の灯(ともしび)
- スコットランドで海外原爆展
- コラム「アトミック・エコーズ」全米で放送
- 会員の広場
- 体験記で伝える 救援と救護
- 安田菜津紀 平和講演会
- ピーター・タウンゼントDAY
- 横瀬昭幸顧問 長崎新聞文化章受章
- 国連軍縮週間行事 市民のつどい
- 秋月辰一郎先生 没後20年のつどい
- 平和映画祭
- V・ファーレン長崎 8年ぶりJ1昇格
- 原爆資料館にも“ポケモンGO”効果



被爆80年記念事業(10月~11月)

長崎から響く愛の4楽章 長崎ピース交響詩



第1楽章 合唱団「翔」のステージ



第2楽章 音楽物語「アニオ一～海を渡る風」



第3楽章 現役医師ミュージシャン「インスハート」

被爆80年記念として、より多くの方に音楽を通して平和を身近に感じていただくため、長崎県音楽連盟のご協力のもと、令和4年度より追悼平和祈念館 交流ラウンジで好評を博してきた「ラウンジコンサート」を「平和と音楽の調べ 長崎ピース交響詩～音楽が奏でる、愛の4楽章～」と題して、長崎原爆資料館ホールに会場を移し、規模を拡大して開催しました。

ベテランから若手まで、様々なミュージシャンや表現者が全4回毎回異なるテーマで平和への願いを込めた音色とメッセージを届け、延べ約520人の多くの方にご来場いただきました。

10/12 第1楽章 | 愛と平和を歌で奏でる
合唱団「翔」、上奥まいこさんによるコンサート

10/26 第2楽章 | 長崎の若きアーティストが奏でるピースアンサンブル
音楽物語「アニオ一～海を渡る風」の上演、
「ユニットN」のスペシャルコンサート

11/2 第3楽章 | 言葉と音楽で平和を奏でる
現役医師ミュージシャン「インスハート」のライブ、
ピアノ演奏と共に永遠の会による「黒本」の朗読

11/9 第4楽章 | 愛と希望を音楽で奏でるフィナーレ
第6回マダムバタフライ国際コンクール受賞者・今野沙知恵さんの独唱、
長崎県音楽連盟出演者によるフィナーレ



フォトジャーナリスト 安田菜津紀 平和講演会



東南アジアや中東、アフリカなど世界各地で取材活動を続け、TBSテレビの情報番組『サンデーモーニング』のコメンテーターとしても活躍している、フォトジャーナリスト・安田菜津紀さんを招き、「戦争のない世界をつくるために私たちにできること」をテーマにした平和講演会を、11月16日に原爆資料館ホールで開催しました。

第1部の基調講演では東日本大震災被災地・沖縄戦激戦地での遺骨収集の話のほか、イスラエルによるパレスチナ自治区への軍事攻撃にも触れ、テレビ・新規ではあまり報じられることのないガザ地区の現状など、現地で自身が撮影した写真も使って説明しました。

第2部のパネルディスカッションには安田さんのほか、地元を代表して平和案内人、交流証言者、青少年ピースボランティア、被爆者がパネリストとして登壇。元高校生平和大使の中村涼香さんが「コーディネーターとなり意見を交わしました。



公益財団法人 長崎平和推進協会

原爆死没者名簿筆耕 森田孝子大書道展



10月18日～26日、追悼平和祈念館交流ラウンジで森田孝子大書道展を開催しました。

今年は被爆80年記念事業として規模を拡大し、森田さん自らの平和への思いを大きな書にして展示したのも見どころのひとつでした。

オープニングイベントでは、書道教室に通う子ども達がピアノと Chernoff の伴奏で合唱を届けました。期間中その歌声をBGMとして流し、和やかな雰囲気の中、書道展を開催することができました。何度も足を運ぶことができました。

被爆から八十年を迎えた今年、長崎平和推進協会、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館の皆様のご協力のもと、とても実りある書道展となりました。

今年も山川剛様、三瀬清一朗様、羽田麗子様、城臺美彌子様の四名の被爆者の方々の体験を書にしたため、平和の想いを表しました。

被爆体験の継承に取り組まれている方々の言葉はあらためて平和の尊さを実感する時間となりました。

被爆の悲惨さを感じ取つていただき、平穏で平和の大切なついた幸いです。 森田孝子



この書道展は今年で4回目となりました。毎年の恒例行事として来られる方も多く、期間中は6千人を超える方にご来場いただきました。長年原爆死没者名簿の筆耕を行っている森田さんの書を、死没者名簿が保管されている追悼平和祈念館で見ていただくことで、被爆者の思いや平和の大切さを多くの方に伝えることができました。



朗読&演奏、映画、対談 ピーター・タウンゼントDAY



令和4年度から継続的に行つて「ナガサキの郵便配達」朗読と音楽で紡ぐ平和への想い」の拡大版として、被爆80年の節目の年に、ピーター・タウンゼント氏の誕生日である11月22日に原爆資料館ホールにおいて3部構成で開催し、約140人の方にお越しいただきました。

第1部では、谷口稜瞬氏の被爆体験を基にピーター・タウンゼント氏が著したドキュメンタリー小説「ナガサキの郵便配達」の朗読と、弦楽器による「ナガサキの郵便配達組曲」の演奏を上演しました。

第2部では、ピーター・タウンゼント氏の長女で優のイザベル・タウンゼント氏が、父と谷口氏の想いを紐解いていく、「ドキュメンタリー映画「長崎の郵便配達」」を上映しました。

第3部では、同映画に主演したイザベル・タウンゼント氏を迎え、ナガサキの郵便配達制作プロジェクト代表の斎藤芳弘さんとの対談を行いました。

イベントを通じて皆様に、核兵器廃絶や世界恒久平和について改めて深く考えていただけた機会を提供できたのではないでしょうか。

被爆80年によせて

長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）
樋川和子副センター長



樋川和子(ひかわ・かずこ)

専門は核軍縮・核不拡散。山梨県出身。日本国際問題研究所客員研究員。2019年に外務省を退職して以降、研究者として「核兵器のない持続可能な世界」を実現するための研究に取り組んでいる。2024年4月より現職。

核兵器が初めて実戦で使用されてからの80年を振り返つてみると、核廃絶を実現する上で何も成果がなかったわけではない。この80年間、少なくとも核兵器が再び使用されることはないなかつた（ただし、偶発的な核使用というのはいつでも起こり得たのであり、実際に使用されなかつたのは単に運が良かつたからだと考える専門家や実

が、核廃絶という課題もまた、まさに「世代を超えたチーフワーク」を必要としているのではないか。

今年8月、大阪・関西万博のワーマンズ・パビリオンで開催された「Women Empowerment Summit 2025」というイベントに参加した際、起業家であり、日本女性財団の評議員なども務められている奥田浩美さんのお話を聞く機会があった。奥田さんのお話の中で特に心に残ったのが、「世代を超えたチーム戦によってしか成し遂げられないことがある」という言葉である。「世代を超えた努力」でも「世代を超えた取り組み」でもなく、「世代を超えたチーフーム戦」（ここでは「チーフームワーク」と呼ばせていただきたい）。奥田さんはこの言葉を女性のエンパワーメントの文脈で述べられたが、核廃絶という課題もまた、まさに「世代を超えたチーフワーク」を必要としているのではないか。

では、こうした成果を核兵器ゼロに繋げていくために、どのような「世代を超えたチーフームワーク」があり得るだろうか。チーフームワークという以上、皆が同じことをするのではなく、適材適所ではないが、それぞれの特性に応じた役割をきちんと担うことが求められる。また、チーフームワークを考えた時、どこが足りていないのか、どこに穴があるかを考えることも重要である。私が従事する研究分野に限って考えると、少なくともいえるのは、日本には他の国に比べて核の分野に専門的に取り組む研究者が圧倒的に少ない。核廃絶を実現するために、市民レベルだけではなく国家や国際機関のレベルで過去にどのような取り組みが行われてきて、どこに問題があり、現在どのような状況になっているかをきちんと理解し、解決策を考えることができないといふ弱みが日本にはあると考える。

その観点からなされている取り組みを一つ紹介した

い。今年7月、核兵器廃絶長崎連絡協議会(長崎県・長崎市・長崎大学が三者一体となって核廃絶に取り組むための枠組み)は戦後被爆80周年の記念事業として、国際人材育成プロジェクト「対話で平和を組み立てる」を立ち上げた。既に若手専門家として活躍している海外の若者と、長崎在住の大学生及び大学院生と一緒に核廃絶に関する研究グループを立ち上げ、オンラインでの研究会を重ねた後、研究結果を報告書の形にまとめ上げ、来年3月に一般向けの報告会を行うというプロジェクトである。研究グループは3つあり、それぞれ、①「新興技術と核兵器」、②「記憶の継承と長崎の役割」、③「気候変動と核兵器」というテーマに取り組んでいる(私は「記憶の継承と長崎の役割」をテーマとした研究グループのメンバーを務めている)。海外からは、カザフスタン、マレーシア、レバノン、ジンバブエ(2人)、メキシコ、カナダ、アメリカ、ロシア国籍の若手研究者の名が参加している。彼らは核関連の分野で既にある程度の研究実績を有し、現在は大学院博士課程や、シンクタンクに勤務し研究を行っている若者たちである。被爆国である日本以外で真剣に核廃絶の問題を研究している若者達と一緒に研究を行うことは、日本の若者にとって大き

い。今年7月、核兵器廃絶長崎連絡協議会(長崎県・長崎市・長崎大学が三者一体となって核廃絶に取り組むための枠組み)は戦後被爆80周年の記念事業として、国際人材育成プロジェクト「対話で平和を組み立てる」を立ち上げた。既に若手専門家として活躍している海外の若者と、長崎在住の大学生及び大学院生と一緒に核廃絶に関する研究グループを立ち上げ、オンラインでの研究会を重ねた後、研究結果を報告書の形にまとめ上げ、来年3月に一般向けの報告会を行うというプロジェクトである。研究グループは3つあり、それぞれ、①「新興技術と核兵器」、②「記憶の継承と長崎の役割」、③「気候変動と核兵器」というテーマに取り組んでいる(私は「記憶の継承と長崎の役割」をテーマとした研究グループのメンバーを務めている)。海外からは、カザフスタン、マレーシア、レバノン、ジンバブエ(2人)、メキシコ、カナダ、アメリカ、ロシア国籍の若手研究者の名が参加している。彼らは核関連の分野で既にある程度の研究実績を有し、現在は大学院博士課程や、シンクタンクに勤務し研究を行っている若者たちである。被

爆国である日本以外で真剣に核廃絶の問題を研究している若者達と一緒に研究を行うことは、日本の若者にとって大き

な刺激となるとともに、多様で幅広い視点から核廃絶の問題を考える良いきっかけになっているのではないかと考える。



「世代を超えたチームワーク」。この80年、直接の被害者だからできたこと、また逆に直接の被害者であっても、生きた時代ゆえに叶わなかつたことなどもあるのではなかろうか。記憶の継承の面でもそうであるが、被爆を直接体験された方々の数が年々減少していく中で、被爆者の方たちが取り組まってきたことをそのまま継承しようとするのではなく、その後の世代として生まれた私たちに更に何ができるのか、今の時代を生きる、もしくはこれから時代を生きる、私たちだからこそできることは何なのかを、チームワークという観点から模索していく必要があるのではないかだろうか。

祝 長崎新聞文化章受章 横瀬昭幸顧問



被爆直後、長崎市古賀町の救護所で母を手伝い、多くの負傷者を見た体験が平和活動の原点になつてゐるという横瀬顧問は「皆さんに支えられ導かれた結果の受章。今後は私が、核兵器廃絶に向け取り組む次世代の若者たちを全力で支えていきたい」と話していました。

2003年には当協会の理事長に就任。18年間にわたる理事長時代には、原爆資料館や被爆遺構を巡るボランティアガイド「平和案内人」の育成事業を始めたほか、被爆体験記朗読ボランティア育成講座を開講し「永遠の会」発足につなげるなど、現在の被爆体験継承の中核を担う事業を次々と展開しました。

また2009年度から2020年度まで「長崎市平和宣言文起草委員」を務め、8月9日の平和祈念式典で長崎市長が読み上げる平和宣言文の作成に携わるなど、団体の枠を超えて長崎全体の平和活動に貢献したことも評価されました。

長崎平和推進協会の横瀬昭幸顧問が長崎新聞文化章(平和・福祉部門)を受章し、11月25日に長崎新聞文化ホールで行われた贈呈式に参列しました。

横瀬顧問は86歳。心臓血管外科医として活躍する傍ら1984年から長崎平和推進協会の理事となり、40年以上平和活動に尽力されています。

国連軍縮週間行事 市民のつどい



国連軍縮週間（10月24日～30日）にあわせ、10月25日「市民のつどい」を開催しました。今年は被爆80年記念事業として2会場に拡大し、午前は屋外で原爆写真展示、折り鶴・工芸船作り、戦時食試食のほか、ミニコンサート、被爆3世でシンガーソングライターの上奥まいこさんや二胡奏者のシッヂーチーさん＆メモリーズによるステージイベントを開催しました。

午後は屋内で、かわち家によるチンドン平和紙芝居、平和な未来を紡ぐ会による平和朗読を行いました。また開催中の森田孝子大書道展も含めたスタンプラリーを実施しました。多くの方にご来場いただき、改めて平和の大切さについて考えるとなりました。



爆心地公園で9月27日、平和への願いや絵を描き入れた手作りのキャンドルに灯をともす「平和の灯」が開催されました。一人ひとりが原爆の惨禍を決して忘れることがなく、若い世代に平和の尊さをつなげていくこと、国連・核兵器の全面的廃絶のための国際デー（9月26日）に合わせて行われ、当協会は実行委員として参画しました。今年も原爆落下中心地碑を中心に、県内外から集められた3000本のキャンドルに明かりが灯され、バルーンリリースや合唱団などによるコンサートが行われました。

多くの人が、戦争のない明るい世界になつてほしいと願いました。

秋月辰一郎先生 没後20年のつどい



長崎平和推進協会の初代理事長で、長崎の反核平和運動を牽引した被爆医師・秋月辰一郎氏を偲ぶ「没後20年のつどい」が10月19日、原爆資料館ホールで開かれました。

爆心地から1.4kmの浦上第一病院で勤務中に被爆しながらも、負傷者の救護活動に奔走する秋月氏を描いたアニメ映画「アンゼラスの鐘」が上映されました。映画を製作した有原誠治監督や被爆者で医師の朝長万左男氏らによるトークショーでは「意見の対立を乗り越え、多くの平和団体が参加する『ながさき平和大会』を実現させるなど、秋月先生が遺された功績は大きい。次の世代につなげていきたい」といった意見が聞かれました。

スコットランドで海外原爆展



10月6日～11月14日、核兵器保有国である英国スコットランドのスターリング大学で、「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」を開催しました。

被爆の実相を伝える写真パネル、被爆体験記、被爆証言映像、折り鶴等を展示し、さらに、講演やシンポジウム、継承部会員三瀬清一朗氏による被爆体験講話（オンライン）など充実した内容のプログラムを行いました。

また、原爆展の開催に向け、7月に長崎で実施した研修プログラムを受講したスター・リング大学の学生2人が、展示会場で案内役を務めました。

被爆の実相を伝え、平和の大切さについて共に考える機会となりました。

へいわ余話4

編集者の独自目線で書くコラム

「ATOMIC ECHOES」 全米で放送される

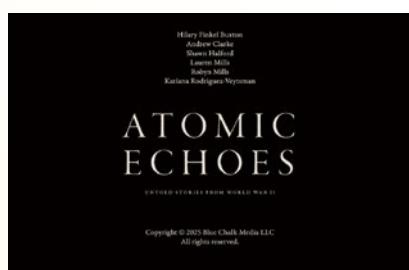
前回(186号で)ご紹介した、アメリカ人女性2人が主人公の「原爆」をテーマにしたドキュメンタリー番組の続報です。今年8月、アメリカで約350局が加盟する公共放送サービス・PBSにより全米各地で順次放送されたそうです。

タイトルは「アトミック・エコーズ～第2次世界大戦の知られざる物語」に変更され、原爆の影響で今も苦しんでいる被爆者が長崎・広島にいること、ケリーさんの祖父が被爆直後の長崎に上陸し「原爆トラウマ」でアルコール依存症になったことなど、日米双方に原爆が傷痕を残している実態を57分の番組にまとめました。

テレビ放送のあとスタンフォード大学・日米国立博物館・AT&Tなど各地で上映会も行われ、ケリーさんによると観衆は原爆の影響の大きさに驚き、涙を流して感動していたとのことです。

番組では2人が写真資料調査部会の松田部会長や米澤さんらに相談するシーンなどもあり、スタッフロールの「SPECIAL THANKS(特別協賛)」の筆頭に「長崎平和推進協会」の名前も入っていました。

ところで、「セサミストリート」などの教育・教養番組を放送してきたPBSですが、運営資金を提供している団体「公共放送機構」が2026年1月で業務停止することになり苦境に立たされているそうです。トランプ政権により11億ドル(1,700億円)あった政府助成金を打ち切られたためで、現在はスポンサー企業などからの支援で放送を続けていて、ケリーさん達も毎月寄付金を送金しているそうです。



From Atomic Echoes: Untold Stories from World War II

SPECIAL THANKS

Nagasaki Foundation for the Promotion of Peace
Nagasaki Atomic Bomb Museum
Nagasaki Film & Media Commission
Nagasaki Prefecture Tourism Association
Hiroshima Film Commission
Hiroshima University and President Mitsuo Ochi
Hiroshima Peace Memorial Park & Museum
Archie Moczygemba
Michas Ohnstad

番組タイトル「アトミック・エコーズ(響き)」

「特別協賛」の筆頭に「長崎平和推進協会」



長崎口ヶ(原爆資料館等)は今年4月実施



左:カリン・タナベさん 右:ピクトリア・ケリーさん

「被爆80年記念 平和映画祭」



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館では平和について深く考えるきっかけを提供するため、平成22年より平和映画祭を開催しています。今年度は「被爆80年記念 平和映画祭」と題し、11月29日・30日に長崎原爆資料館ホールで実施し、両日合わせて280人を超える皆様にご来場いただきました。29日には映画『あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。』の上映に先立ち、知覧特攻平和会館の語り部にご講話いただき、来場者の皆様には特攻について理解を深めたうえで映画をご鑑賞いただきました(30日は映画上映のみ)。また、両日とも会場前に同会館からお借りした特攻に関する資料パネル20枚を展示し、多くの方が熱心にご覧になっていました。

NO.35

写真資料調査部会 今泉 宏



小さな活動の積み重ねが
平和な世界をつくる
これまで様々な立場で平和活動に
関わってきましたが、今年新たに写
真資料調査部会が、私の活動に加わ
りました。写真は事実を確実に記録
しています。被爆の実相を伝えてい
くために、写真から得られる情報知
識を身につけ、これからも平和活動
に生かしていきたいと思います。

被爆80年の今年は、市立図書館
で二週間にわたり「原爆写真展」を
開催しました。日ごろ原爆資料館に
は行つたことがない方もたくさん足
を運んでくださり、大変好評でし
た。来年夏も同図書館ロビーでユ
ーリ・スボランティアの力も借りて「原爆
写真展」を開催する方向で準備を進
めています。ぜひご来場ください。

Peace Wing Nagasaki
会員の広場

「小さな活動の積み重ねが
平和な世界をつくる」



